

大草谷津田いきものの里 自然観察会

冬越しするムシたち

太田 慶子（千葉市）

日 時：2023年12月17日（日）10：30～12：00 天候：晴れ
参加者：16名（大人8名、子ども8名）
担当指導員：太田、木下、萩 参加指導員：相吉、岡田

12月だというのに20度を超えた昨日とは違い、ほぼ平年並みになって、朝のうちは曇りがちだったが、晴れ間が出てきたので、トンボも出るかと思われた。前日までと午前中の下見で、カマキリの卵のう4種、ジョロウグモの卵のう、クサグモの卵のう、ウラギンシジミ成虫、そしてカブトムシの幼虫などを確認しておいた。

はじめに、冬でもムシたちは「成虫、幼虫、さなぎ、卵」と形を変えて、できるだけ乾燥しないよう、温度差も少ないところで工夫して寒い冬を過ごしていると話す。

そして広場の物入に越冬しているナミテントウの集団とヤモリ（死骸と幼体）を子どもらに見せることからスタート。

ドウダンツツジには、外来のムネアカハラビロカマキリの死骸と、そのたくさんの卵のう（黒っぽいのが特徴）を子どもらも見つける。

女の子の中には、マンリョウの赤い実、ヤブランの黒い実、ジャノヒゲの青い実を採って楽しむ子がいて、ビービー弾のように平らなところではよく跳ねることを話し、実際に最後平らな道で跳ねさせて遊んでもらった。

オオカマキリの卵のうのある日当たりのいいところには、ツチイナゴ（成虫越冬）やコバネイナゴが出てくるがなかなか飛び跳ねる元気はない。

朽木の下にカブトムシの大きな幼虫を見つけておいたが、幼虫を手にしてなかなか離さない子がいた。そばにはたくさんの黒い糞があり、朽木を食べて大きくなったことがわかる。地面に置かれた朽木は虫たちの越冬場所として大事なのだ。

田んぼの水路で捕ったドジョウとオオタニシ、アメリカザリガニの子、をバットに入れて見せていると、アキアカネが参加者の帽子に止まったのを、スマホでパチリするお父さんも・・・水路で久しぶりに見たと、珍しいタイコウチをゲットして感激しているお父さんがいた。

コガマの穂を採っておいたのに触ってもらい、ムクムクと膨らんで風を受けては飛び散る種子に感激するお母さん。穂には、チョウセンカマキリの卵のうも付いていた。

コカマキリの卵のうは地面付近の折れ枝についていた。たくさんの卵のうが見られてよかったという子の感想があったほど、カマキリの卵のうが見つかった。

まだ孫が小さいけれど、大きくなったらここに連れてこようと下見に来た、という方が、子どもらに菓子まで持参されていた。



タイコウチを手



カブトムシの幼虫は人気者